



山口県

宇部市

山口県

“宇部方式”で地域の環境を守ろう

戦後、産官学民の強力なパートナーシップにより、ばいじんによる大気汚染を乗り越えてきた山口県宇部市。地域が一体となって取り組む“宇部方式”のノウハウを生かし、中国貴州省安順市を支援している。

【山口県】

宇部市



市内の下水処理施設「東部浄化センター」を視察する研修員たち。「市民に快適な暮らしを提供するために下水処理は必要不可欠です」と同センターの岡島宏さん(中央)

山口県宇部市

面積287.7平方キロ、人口17万5,000人。山口県西部の周防灘に面し、温暖な気候に恵まれている。大手総合化学メーカー宇部興産株式会社の本拠地でもあり、沿岸部を中心に同社の工場が立ち並ぶ。戦後の公害被害を、産官学民による“宇部方式”により克服。その功績が認められ1997年に国連環境計画の「グローバル500賞」を受賞している。環境分野の国際協力も盛ん。

産官学民の連携で公害被害から脱却

ガラガラと音を立てながら、クレールンで運ばれていく大量のごみ。ここ、宇部市リサイクルプラザでは、1日約30トンのごみがパッカー車で集められてくるという。

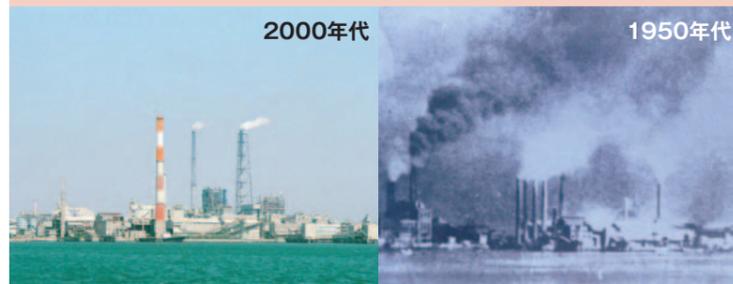
「回収したごみはどうするんですか」「主に再資源化していますが、できないものは埋め立てたり、燃やせるものは焼却したりと、適切な方法で分別処理します」

幾重にも重なるごみの山をガラス越しに見ながら、熱心に質問を投げ掛けているのは、中国貴州省安順市から来たJICAの研修員たち。自治体の職員として環境対策

に携わる彼らは、10月中旬、宇部方式で有名な山口県宇部市のノウハウを学ぶために来日した。

「市が集めるだけでなく、市民も直接資源ごみを持ち込むことができるシステムはいい。このような施設を見学することで、市民の環境に対する意識も高まりますね」

瀬戸内海の西端、



1950年代に“灰の降る街”と称された宇部市は、産官学民の連携による対策を講じ、きれいな空を取り戻した

周防灘に面した山口県宇部市。街中を見回すと、きれいに手入れされた街路樹や色鮮やかな花だん、個性豊かな彫刻が目につく。緑と花と彫刻のまじりをモットーに掲げる同市は、半世紀以上にわたり、日本国内でも先立って環境保護に取り組んできた。

しかしこの美しい町は、その昔、世界一灰の降る街と呼ばれていた。第二次世界大戦後、豊富な石炭資源の恩恵を受け、順調に復興を遂げた同市。だが、その負の遺産として残されたのが、ばいじんによる公害だった。「地元の産業が発展すればするほど、石炭使用量は増える。空には常にばいじんが舞っていて、洗濯物が真っ黒になるほどだった」と、宇部市市民環境部環境政策課の藤水義昭課長は話す。

このままでは、自分たちの街が汚染されてしまう。そこで1949年、自治体がかじを取り「宇部市降ばいん対策委員会」(51年「宇部市ばいじん対策委員会」に改称)を設立。「これは地域全体の問題。産官学民が一体となって改善していかなければ。これが『宇部方式』の始まりだった。

宇部方式の特徴は、徹底した情報公開。山口大学や専門家の協力を得ながら、定期的に市内の環境汚染に関するデータを収集。包み隠すことなく、すべてを市民に向けて公開した。大切なのは、地域の人々が問題を認識し、行動すること。産官学民がそれぞれの立場で公害対策

を実施することで、宇部の街は生まれ変わっていった。

市のノウハウを途上国へ還元

このような長年の取り組みが高く評価され、97年には国連環境計画(UNEP)の「グローバル500賞」を受賞。これをきっかけに「宇部の経験を環境問題に苦しむ開発途上国に還元したい」という声が上がることになった。そして98年には、市内の企業関係者やOBが集まり「宇部環境国際協力協会」を設立。環境分野の国際協力を推進している。

その取り組みの一つが、2002～04年度のJICA個別研修「環境保全コース」。さらに05～07年度には、JICAの草の根技術協力事業を通じて「環境保全パートナーシップコース」を実施。友好都市である中国山東省威海市の環境保護局職員などを招き、地元企業の視察などを通じて、宇部方式のノウハウを伝えてきた。

さらに09年度からは、貴州省安順市に対して新たな草の根技術協力事業「安順市における環境保全管理研修」を開始した。貴州省は中国で最も貧しい地域の一つ。その中でも、安順市は近年急速な経済成長を遂げているが、同時に環境問題が深刻になっている。宇部環境国際協力協会理事長の浮田正夫山口大学名誉教授は「安順市は石炭産業が盛んで、宇部市と産業構造が似ている点がある。宇部方式のノウハウ

を活用すれば、解決の糸口が見つかるはずだ」と話す。

この日、海岸沿いの東見初埋立地を訪れた貴州省環境保護庁の孫好之さんは、「リサイクルの難しい産業廃棄物を、適切に管理された埋立地の材料として活用することで、企業活動と環境保護が両立できるんですね」と強い関心を示していた。安順市環境保護局の張静嘩さんも「産官学民連携の必要性は感じているけれど、普及できていない。地域の人が協働で取り組めるような仕組みづくりをしたい」と意気込む。

「産官学民の信頼関係は、宇部市が長年にわたって築き上げてきたもの。安順市でも自分たちに合った『宇部方式』を見つけてほしい」と、宇部環境国際協力協会の丹羽孝純事務局長は期待する。

産官学民が一体となって取り組むまちづくり。地元の人々によってはぐくまれた『宇部方式』の理念と精神が、海を越えて、途上国に広まりつつある。



市内の企業の産業廃棄物は、その多くが東見初埋立地に集められている



宇部市リサイクルプラザでごみの再資源化のプロセスを学ぶ



宇部興産株式会社の宇部セメント工場。ごみ焼却灰、下水汚泥などのリサイクルについて学んだ